

## 尾張北部の旧丹羽郡の学校史(3)

### — 犬山市の藩校・寺子屋から小学校設立へ —

#### *School History of Old NIWA District in NORTH-OWARI (3)*

#### — From HAN School and Temple School to Elementary School in INUYAMA —

木全 清博 KIMATA Kiyohiro

(前人間発達学部)

#### はじめに

尾張北部の寺子屋の教育から小学校の設立・展開に関して、旧丹羽郡と旧西春日井郡に焦点づけて検討してきた。尾北地域での寺子屋の師匠への束脩・謝儀<sup>そくしゅう しゅぎ</sup>の金納率の高さに注目して、天保年間から明治維新期の村落の生業や栽培作物の経済的な発展と寺子屋の教育実態や就学のようなすを明らかにして、明治初期の小学校の設立・開校につながる学校史を考察してきた。尾張北部地域の岩倉市と北名古屋市の寺子屋<sup>1)</sup>、旧丹陽村・旧西成村(現一宮市)の寺子屋と私塾有隣舎<sup>2)</sup>、江南市・扶桑町・大口町の寺子屋<sup>3)</sup>の教育を分析したので、本稿では旧丹羽郡の最後として犬山市を取りあげてみる。

明治維新の変革のなかで、犬山藩は1868(慶応4)年1月24日に尾張藩から独立した。1869(明治2)年2月14日に版籍奉還があり、藩主が知藩事となったが、1871(明治4)年7月14日には廃藩置県が行われて藩が廃止され犬山県となった。同年11月22日、名古屋県と犬山県は合併して名古屋県となり、犬山県は消滅した。犬山藩の成立からわずか3年半、犬山県は4ヶ月の短命であった<sup>4)</sup>。さて学校史で見ると、犬山では幕末期の1840(天保11)年に藩学として敬道館が開校され、藩士に対する教育が実施されており、城下町では、商工農民の子弟へは寺子屋の教育が行われていた。全国的には、藩校の廃校後中学校への転換がめざされることが多いが、犬山では、藩校と寺子屋が統合されて小学校の設立・開校へと発展していったケースである。身分別学校を廃して近代学校の理念を実現しようとしたが、旧城下町での教育の実態はどうであったろうか。また、犬山市域の城下町以外の農村部や山村部の村落では、どのような教育が行われたであろうか。

江南市・扶桑町・大口町は、桑の栽培、蚕の繭、生糸、絹織業の養蚕地帯であり、養蚕地域の農民・商人たちが寺子屋の師匠に束脩・謝儀で金納化していたことをみた。また、名古屋の城下町とかかわりの深い枇杷島市周辺は青物地帯が展開しており、一宮の三八市とつながる岩倉市や北名古屋市(師勝・西春)一帯では木綿栽培が行われた綿作地帯であった。幕末期には尾北地域での地域的分業の成立が、寺子屋への金納化率の高さの起因であった。犬山の城下町や周辺の山村部、農村部ではどのような様相であったらうか。

さて、明治末から大正・昭和初期に全国を歩いた歌人若山牧水は、犬山を訪れて次の和

歌を残した<sup>5)</sup>。

「犬山の 城に登り立ち わが見るや 尾張だいらの 秋のくもりを」

「桑畑の 中をすぎ来て かへりみる 犬山の城は 秋霞かな」

犬山焼にも言及して、歌を詠んだ。

「とりどりに 陰を落として ならびたり 陶物づくりが 庭の白甕」

「火を入れぬ 籠のすがたの さびたるに 射して静けさ 秋の日かげ」

若山牧水は、大正末から昭和初期にまだ桑畑の多く残る犬山郊外の農村地域を歩き、犬山城に登城して尾張平野を眺め、丸山の犬山焼の工房を訪れていた。明治末年の犬山の産物は、「米・麦・繭・生糸・絹織物・白木綿」と犬山焼であった。

筆者は生まれ故郷の岩倉の生家から東方にそびえる秀麗な尾張富士と本宮山を眺めて育った。小学生の同級生と入鹿池までサイクリングをし、中学生になると尾張富士に登り、入鹿池でボート遊びに夢中となった。また、犬山の友人の家に行き木曾川河原において石投げや水遊びをし、時には上流の栗栖方面にまで足を伸ばした。白帝城の名をもつ犬山城の天守閣に今も年に一度は登城するが、眼下の広大な濃尾平野を眺めると心豊かになれる。

## 1 犬山の城下町と藩校敬道館の教育

### (1) 城下町犬山の沿革と近世の町並み

犬山は尾張の最北端に位置しており、北部の岐阜県との境を木曾川が西南に流れる。木曾川が山岳部から濃尾平野に流れ出たところが犬山であり、犬山城の地点が標高84メートル、旧城下町は50～60メートル、城下の南部は40メートルの平地となる<sup>6)</sup>。犬山に城が築かれたのは、1469（文明元）年の<sup>きのしたじょう</sup>木下城（現在の市役所付近）といわれる。管領<sup>しほよしさと</sup>斯波義郷の家臣<sup>ひろちか</sup>織田郷広が築城し、次男<sup>ひろちか</sup>広近に守らせたといわれる。広近は郷広と共に岩倉城に居り、後に<sup>おぐちじょう</sup>小口城（大口町）に居住したが、木下城に移った。この城が犬山の城郭の始まりであった。その後、1537（天文6）年<sup>のぶやす</sup>織田信康が木曾川南岸の断崖上に城を築いて移ったので、木下城は廃城となった。

戦国期の織田信長・豊臣秀吉の時代から江戸時代にかけて、犬山城の城主はめまぐるしく交替する。1584（天正12）年の小牧・長久手の戦いの折には秀吉方の池田恒興が城を支配し、秀吉を迎えている。秀吉は本営を楽田に移して、小牧山城の家康と対峙するが、和議の結果犬山城は<sup>のぶかつ</sup>織田信雄が支配して、家臣を城代にする。関ヶ原の戦いの後、徳川幕府が成立して尾張藩主に家康9男の<sup>よしなお</sup>徳川義直が就き、<sup>おつけかろう</sup>御付家老となった<sup>まさなり</sup>成瀬正成が1618（元和4）年に犬山城主となった。成瀬氏は3万石の石高を封ぜられ、明治維新まで9代が在城した。成瀬氏の時代に、犬山は典型的な近世城下町として整備されていく<sup>7)</sup>。

城下町犬山は、木曾川を背にして城郭を構え、南に向かって直線道路が5本、東西にわたる4本の道を交差させた町割りであった。町の中央部に町人地をおき、武家町はそれを

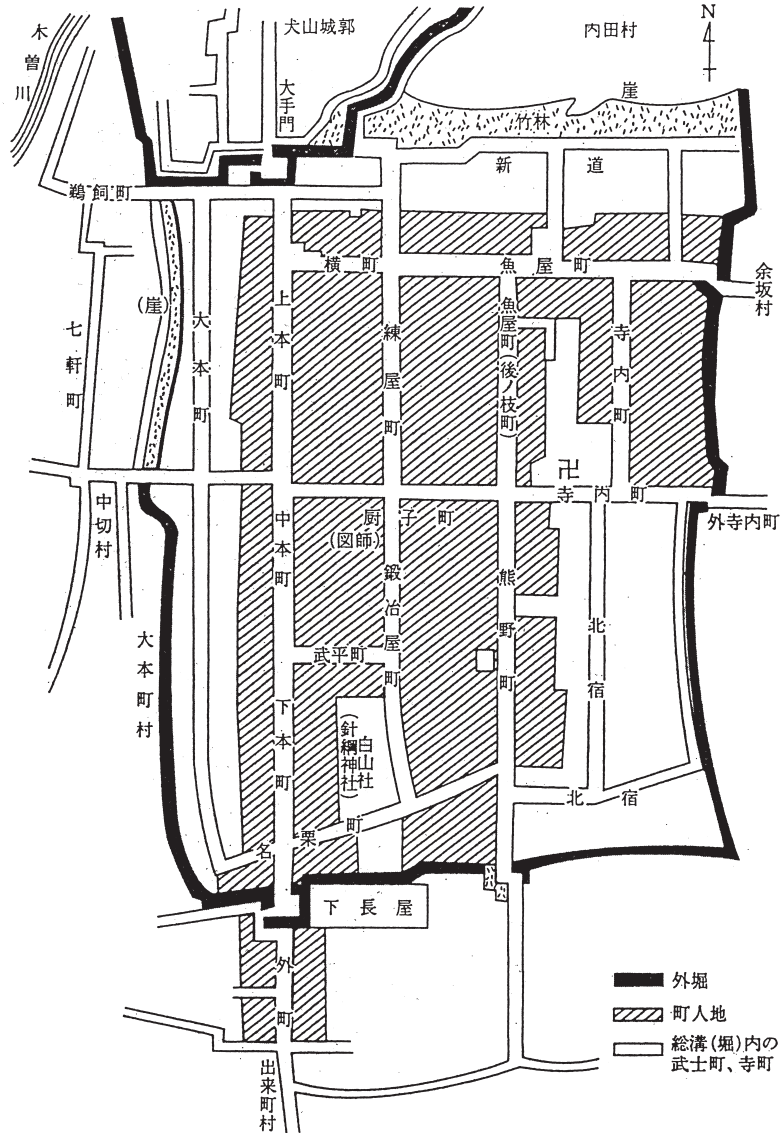


図1 犬山城下絵図

(『犬山市史』通史編上 1977年 480頁)

取り囲むように配置して町全体を土居や濠で囲んでいる。『犬山市史』通史編上(1997年)の「犬山城下絵図」は、図1のとおりである<sup>8)</sup>。

犬山の城下町には、かみほんまち上本町・なかほんまち中本町・しもほんまち下本町・なぐりちやう名栗町・かじやちやう鍛冶屋町・ねりやちやう練屋町・よこまち横町・うおやちやう魚屋町・くまのちやう熊野町・じないまち寺内町・うかいまち鶏飼町・そとまち外町があり、城下廻りの村として内田村・余坂村・大本町村・なかぎりむら中切村・きのしたむら木下村の5村があった。城下から離れて周辺地域の農村・山村として、くるす栗栖・つがのお継鹿尾・ぜんじの富岡・とうのじ善師野・あずくじ塔ノ地・今井・奥入鹿・安楽寺・富士・二ノ宮・楽

表1 1804 (文化元) 年犬山町方の人口

町名	家数	医、職人 (戸)	農	人数
上本町	42	4		84
中本町	47	6		137
下本町	47	16	1	141
名栗町	51	4	35	148
外町	73	15	10	196
練屋町	32	22全部商人	10	94
鍛冶屋町	60	14	17	149
横町	29	4		43
魚屋町	80	14	30	248
熊野町	73	13	40	210
寺内町	56	2	54	178
鵜飼町	95	船持 8	62	343
計	685	122	259	1971

(『犬山市史』通史編上 480頁)

に組み込んだことを示すと説明している)。町方家数から職業の詳細がわかり、医師5軒、大工27軒、鍛冶屋23軒、木挽6軒、葺師6軒、桶師7軒、畳師3軒がおり、鋳物師・座頭が各1軒、船持8軒、筏乗前持4軒、鵜匠1軒とある。1804 (文化元) 年の城下町犬山の家数と人口の概要は、表1のようである。685軒の家数の町別が分かり、職人、農民の分布も分かる<sup>9)</sup>。

内田・余坂・大本町・中切・木下の城属5ヶ村についても、1840 (文化元) 年における村方数や家人数が分かり、村方家数385軒、人口1515人 (男752、女763) である。330軒が農業兼日雇いで、17軒が商業を兼ねており、鍛冶屋7軒、大工6軒などの職人などで、14軒の船持、8軒の船頭がいた。城麓の北東の内田村は877石余で大きな村で庄屋2人がいた。西方の中切村も139軒と家数も多く、ここにも庄屋が2人いた。

城下町犬山の市の開設は、1666 (寛文6) 年ごろといわれ、毎月2の日に横町・魚屋町、7の日に練屋町・鍛冶屋町で開かれて、上本町・中本町・下本町では17、22、27日に開かれた。犬山では、2と7の日に町ごとに順次、市が開設されており、江戸時代後半になっていくと商品の流通が一層活発化していった。犬山の城下町には周辺地域の村落の農民たちも多様な商品を持ち寄り、商業取引が行われていた<sup>10)</sup>。

明治維新後の1872 (明治5) 年に、犬山は旧荘園名をとって稲置 (木) 村と改称した。明治初期の犬山の地名表記は稲置村であったが、1889 (明治22) 年4月の町村制施行の時に、犬山の古名に復して、町制を施行して犬山町とした。なお、犬山の市制は、戦後の1954 (昭和29) 年に犬山町と城東村・池野村・楽田村・羽黒村の1町4村の合併によって施行された<sup>11)</sup>。

田・羽黒・稲置・五郎丸・橋爪・木津・上野があった。

寛政期 (1789~1801年) の「犬山並城属山城番地絵図」で町方の説明として、西6町は上本町・中本町・下本町・名栗町・外町・鵜飼町、東6町は練屋町・鍛冶屋町・横町・魚屋町・熊野町・寺内町で、これを犬山12町と呼んだとする。1797 (寛政9) 年の町人地では、町方家数675軒、人口1971人 (男963・女1008) であり、商家の数340軒、商家除く職人や農民の数335軒であり、両方ともほぼ50%であった。犬山の城下町には、日雇い兼農業者が249軒 (約36%) あり、城下町内に農民を含みこんでいる点が、近世城下町では珍しい (犬山市史は、職業未分化のまま多くの農民を町並みの中

## (2) 藩校敬道館の教育

犬山藩校敬道館については、文部省『日本教育史資料』巻(1890〈明治23〉年)と『同』四(1891〈明治24〉年)が学制、沿革、教則、教科書、試験規則、職員組織などを、愛知県の報告に基づき掲載している<sup>12)</sup>。敬道館の先行研究では、市橋鐸「犬山藩の教育とその事蹟—敬道館開書—」(『愛知教育』1934年5月)がある<sup>13)</sup>。『犬山市史』通史編は、ほぼ上記から引用しており、藩校敬道館の新資料の発掘をしていない。

尾張藩の第8代付家老成瀬正住が、1840(天保11)年5月に西古券3番地に藩校を創設した(位置は図2参照)。市橋鐸は開書きにより、創設年を同年6月、開館を翌1841(天保12)年4月としている。これまで藩士は家塾で学んでいたが、藩立学校をつくり子弟を入学させることとした。敬道館生徒の年齢は制限なしで随意入学を許した。「又各自ノ意向ニ任セ家塾等ニテ修学シ或ハ藩費私費ヲ以テ他国へ遊学スルコトヲ許可セリ」とした。藩立学校では「藩士ヲシテ生徒ト共ニ講義ヲ聴聞セシム」とした。注目すべきは、藩士の子弟への学事奨励だけでなく、平民の子弟の入学も許可していることである。平民の子弟は「家塾寺子屋等ニテ修学セシノミナレドモ、後藩立学校へ入学スルコトヲ許可ス」とした。また「家塾寺子屋ヲ開設セントスル者他ノ検束ヲ受クルナク何人タリトモ自由ニ開設スルコトヲ得タリ」として、藩内での学事を大いに奨励した。

藩主成瀬正住は犬山の城下に藩校の敬道館を開設すると共に、名古屋の藩邸内にも学問所を設けて、同所は1868(慶応4)年から要道館と称した。両学校の束脩・謝儀は「無之」で、学校経費は「一周年ノ学費ハ別ニ予算ヲ立テス現費藩主ヨリ支払イ、藩士ニ賦課スル等ノコトナシ、其費額年々増減アリ一定ナラズ」であった。

就業時間は毎日4時間で「朝五ツ時ヨリ昼後八ツ時マテ」として、現在の午前8時から午後2時まで、学科は皇学、漢学、算法、筆道、習礼(伊勢流)であった。藩校は武道の稽古もあるので、「兵学、弓馬、槍剣、砲術、遊泳等ノ演武場ニ就キテ之ヲ修メ学校ニテ兼修ス」。教科用書には、「孝経、四書、五経、文選(素読)、国史略、十八史略、元明史略、日本外史、四書集註、文章軌範、日本政記、日本書紀、春秋左史伝、国語、詩経、易経、史記、漢書、資治通鑑、延喜式、令義解(講義)、洋書翻訳書類」が使用され、この順序に従って学習した。試験は内試験と表試験があった。内試験は毎月1回、1ヶ月学修した後に行われ、教授の前で素読を行わせて読み仮名を付けさせた。優秀者には筆墨が褒美として与えられた。表試験は卒業試験であり、総裁や主事の前で四書や五経から随時摘出して行われた<sup>14)</sup>。時々藩主が臨校して「生徒ノ試業ヲナシ又藩士ノ講義ヲ聴聞」した。

藩校には、孔子を祀る聖廟があり、孔子像がおかれて、祭儀が執行された。「聖廟ヲ設ケ聖像并ニ四配ノ神位ヲ祭り春秋積采ヲ執行ス、但積采ノ日出席ノ者ハ礼服ヲ着ス」とあり、藩校の春と秋の重要な積菜(積)儀式が仲春・仲秋の上丁の日に行われた。髪斗目麻上下の礼服を着用して式に臨み、式後に赤飯、お煮染めをいただいた。

1840(天保12)年開館時の学校組織は、職名・俸禄が「総教20石、幹事10石、教授5

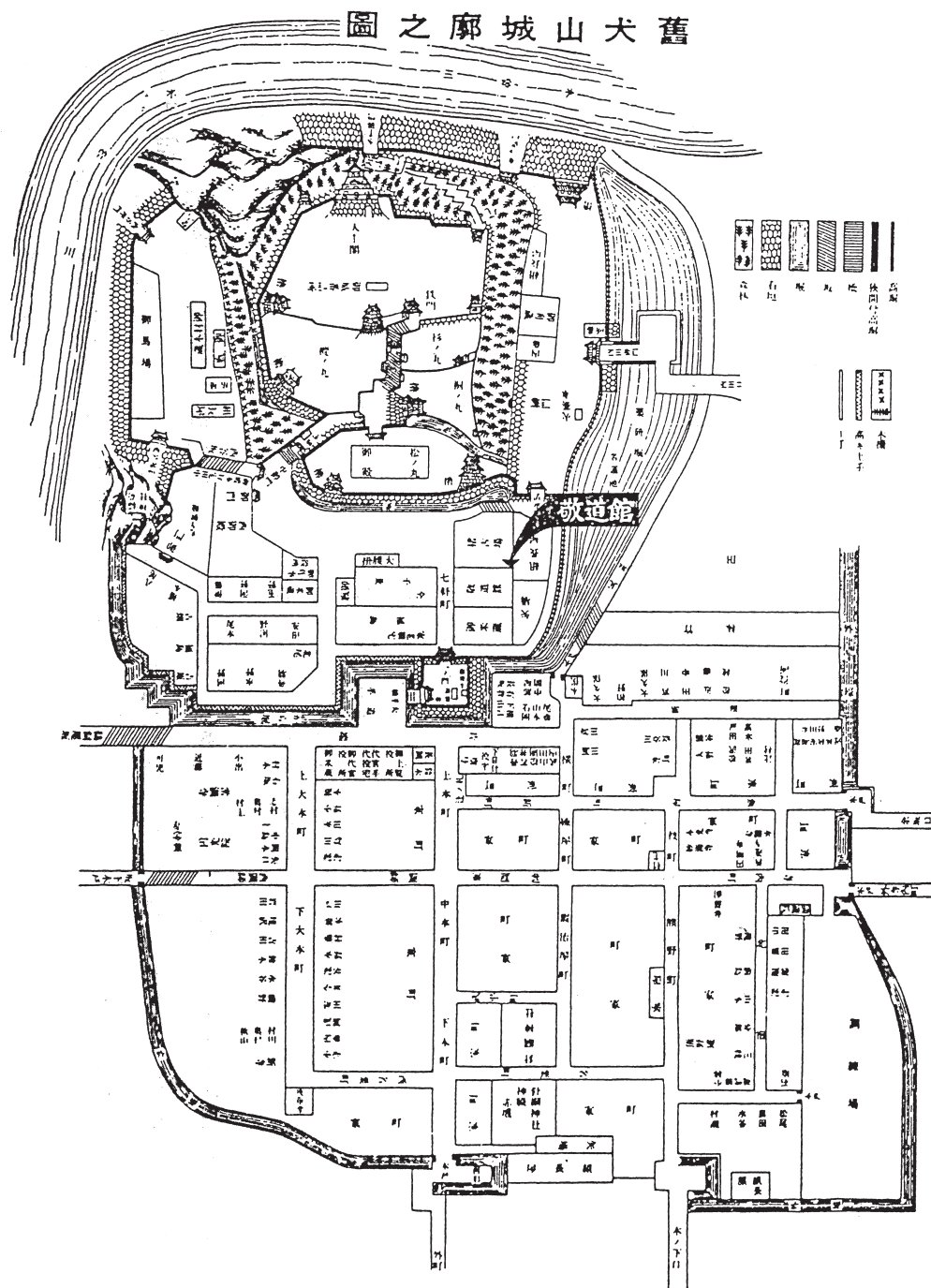


図2 旧犬山城郭之図  
 (『犬山市史』通史編下 近代現代 1995年 280頁)

石、助教2石、監生2石、授読金7両、筆生金3両、給事」で、職員数はおよそ20名であった。総教は家老、幹事は用人、監生は取次の格式の者が兼務した。監生は教務担当であった。1861～63年（文久年間）に教則及び職員等を改正して次のようにした。文久年間の改正で「総裁1人・主事1人・教授1人・助教1人・監生3人・掌儀1人・授読5人・助教7人・書記5人・給事3人・校僕2人」となった。掌儀とは生徒の監督・取締を担当する職で、授読は素読を教える職であり、書記は庶務と会計を担当した。生徒数は藩学校1年平均で約150人であった。ちなみに学校経費は、1年平均で「米110石係員家禄ノ外ニ宛行年給、金3140円諸費」であった。藩学校の建坪は196坪3合3勺で、藩学校書籍の部数は約258部となっている。

1870（明治3）年12月に職員組織の改正があった。藩校は、総裁1人（20石）・教授1人（10石）・助教1人（7石）・監生3人（5石）・授読11人（4石）・助教1人（2石）・習書師4人（2石）・算法師2人（2石）・小夫40人（3石7斗5升）となった。

藩校の教授として、『日本教育史資料』四には戸田勉室、鈴木玄道、村瀬太一の3名の小伝がある<sup>15)</sup>。年齢は数え年。

・戸田勉室——諱孝本、通称新吾、後忠蔵、犬山藩家臣で天保年間に敬道館教授、在勤54年、4君に歴事して門人数千有余人、1863（文久3）年12月病死、74歳。

・鈴木玄道——実名豊、字萑郷、号紀水。幼少から戸田勉室・大野功興より業を受ける。林良益から漢方、飯沼慾斎から蘭学を学ぶ。文久年間に藩主が学制を改め招聘された。藩校に初め助教で、後に教授で在勤20年間、1878（明治11）年11月病死、54歳。

・村瀬太一——諱黎宇、字太乙、幼名外太郎、号山人、美濃国上有知（岐阜県美濃市）の出身。京都で頼山陽に師事。山陽没後に名古屋に帰り家塾を開く。天保年間に犬山藩主に招聘され、名古屋藩邸の儒官となり要道館で教えていた。明治維新後に犬山藩校敬道館と合併したので、犬山に移って教授となる。在勤30余年、1881（明治14）年7月病死、79歳。

市橋鐸によれば、敬道館の助教には戸田勉室の門下から川島養蔵、下山健治の2人、村瀬太乙の門下から八木雕・杉山建次郎・木村易・柴山伴男の4人がなっている。算術助教の大野勘左衛門は丹羽盤恒の門人、書道も俳句も巧であり、かつ勘定奉行も兼ねていた<sup>16)</sup>。また、講師としては、国学の植松茂岳（鈴廼屋出身）が古事記を基にして国学を、村瀬藤城（上有知の儒者）や角田錦江（笠松の漢詩文家）が儒学、漢詩の講義に招かれている。講師の講義日には、藩校生徒だけでなく、藩士が集められた。

## 2 城下町犬山の寺子屋の教育

犬山の寺子屋教育について、城下町犬山の寺子屋と犬山市域の農村・山村の寺子屋に分けて見ていく。城下町犬山の寺子屋一覧は、表2のとおりである。この表は、『愛知県寺子屋一覧』（1973年）の寺子屋表を基礎にして、『日本教育史資料』八（1892年刊、1883

年調査)と『維新前寺子屋、手習師匠、郷学校、私学校の調査』(1931年調査)との関連を示した。なお、『犬山市史』資料編6の寺子屋は、『愛知県寺子屋一覧』(1973年調査)を転載したもので新規に調査を行っていない。この表で○印は1883年調査、△印は1931年調査にあるもの、□印は1973年調査で新出、●印は1973年調査に記載のない寺子屋を示した<sup>17)</sup>。

表2 犬山市の寺子屋(1)

師匠名	身分	所在地	生徒数	学科	開業	廃業	備考
<b>犬山市街地の寺子屋一(旧犬山町域) 稲置村一犬山村一犬山町</b> ：明治22年10月に町制							
1 大野眞吾	医	稲置村	男135女110	読・書・算	弘化2	嘉永期	○
2 大野直吾	平民(農)	同	男50	同	天保期	慶応期	○
3 浅岡三二	士	同	男30	同	明治初		○
4 山本喜兵衛	同	同	男70	書	嘉永期	安政期	△
5 戸田孝一郎	同	同	男70	読・書・算	明治初	* 儒官戸田勉室の子	○ △
6 真野政忠	同	同	男15	同	明治初		○
7 斎藤光裕	同	同	男15	同	明治初		○
8 深津繁一	同	同	男60	同	維新前	明治初	○ △
9 木全円右衛門	同	同	男60	書	嘉永期	安政期	* 31.73年は木俣 △
10 木全円太郎	同	同	男60	読・書・算	維新前	明治初	* 73年は木俣 ○
11 永田逸平	平民	同	同	書・算	維新前	明治12	○ △
12 願入寺	僧	同			文政2	明治初	□
13 泰法	同	同			維新前	明治初	* 輝東庵 □
14 常満寺	同	同		読(漢)	明治10	明治中頃	□
15 鈴木文拙	医	同		読(漢)・儒学	天保期	明治初	□
16 日比野守竜	神官	同		書	天保期		□
17 慧海	僧	同		同	慶応期	明治初	* 薬師寺 □
18 黄梅院	同	同		同	慶応期	明治初	□
19 臨溪院	同	同		同	慶応期	明治初	□
20 祥雲寺	同	同				* 明治6 稲置義校	□
21 専念寺	同	同					□
<b>(旧岩橋村・旧高尾村) 明治39.10一犬山町に合併</b>							
22 永田源次郎	平民	五郎丸村	男20	読・書			○
23 庚申堂	僧	同				* 明治5 義校、明治6 不二見学校	□
24 今井寿幸	神官	同	男8女5	読・書・算・神道・国史	不詳	明治5年頃	△ ●
25 后籾木津	士	木津村		読(漢)	天保期	明治初	* 31年調査平民 △
26 正久寺	僧	橋爪村	女少数				□

(注) 1973年調査は、24今井寿幸の寺子屋が欠落している。

1973年調査と『犬山市史』資料編6(1989年)が欠落させた、24今井寿幸の寺子屋は1931年調査では詳細な実態が報告されている。五郎丸村の神官今井寿幸の寺子屋の寺子数は男8人女5人と少ないが、学科は読・書・算だけでなく神道・国史も教えている。開業時期は不明で1872(明治5)年頃に廃業している。習字は「いろは・名頭(源平)・村



附・商売往来・国附・手紙文」で、読本は「童子教・庭訓往来・四書五経及び習字用本」を兼用しており、算術は算盤を主とするもので開平・開立まで教えた。謝儀は、正月2日(金1分)・3月3日(金2朱)・5月5日(2朱)・7月13日(金1分)7月7日(金1朱)・9月9日(金2朱)であり、寺子は「凡1カ年およそに金1両内外(米一石程)を御礼として、水引を掛け持参」した。

以下に、城下町犬山の寺子屋についての特徴をあげてみよう。

1. 寺子屋の師匠の身分は、圧倒的に士族と僧侶が多くて各10人であり、医者、神官、平民(農)が各2人であった。丹羽郡内では士族身分の比率が高いのは犬山だけであって、城下町ならではの特色であった。
2. 開業時期を明治初年とする寺子屋4校は、明らかに士族が廃業後に寺子屋経営者に転身したことを示している。その後、彼らは小学校の教師に転職していきことが多い。開業時期は天保期(1830~44)4校、弘化期1校、嘉永期(1848~54)2校、慶応期(1865~68)3校と幕末期に集中しており、丹羽郡全体の傾向とも一致している。
3. 寺子屋の生徒数に関して、大野真吾の寺子数245人(男135人女110人)は突出して多い。他の寺子屋では男50~70人が6校、13~30人の寺子屋が5校あった。1973年調査が発掘した寺子屋12校は、どこの寺子屋も生徒数を記載していない。女子の通う寺子屋は、大野真吾の寺子屋以外見られない。全体として、丹羽郡は女子の寺子数はきわめて少ないのが特色で、隣の中島郡に女子の寺子が多いのと対照的である。
4. 学科に関しては、読・書・算の3科が8校、読(漢)・書の2科が1校、書・算が1校、書のみ6校、読(漢)のみ3校であった。3科と神道・国史が1校あった。犬山の城下町の寺子屋は、城下での商業活動が盛んで他地域に比べて算術を学ばせる必要性が高かったからであろう。書・算の2科を教える寺子屋があったというのも、算術の重視が窺える。なお、書のみの寺子屋は6校で、うち5校が寺院であった。不明は6校であった。
5. 束脩・謝儀に関しては、1973年調査では記載が無い。1931年調査では戸田孝一郎始め、永田一平・后藤木津・木全円右衛門・山本喜平衛・深津繁一の士族が師匠の6つの寺子屋は「応分の謝儀」と書いているだけで、金納か物納かも不明である。
6. 寺子屋の位置であるが、城下町の新道の寺子屋は、戸田孝一郎・木全円右衛門・山本喜平衛の3校で、上大本町が永田一平・深津繁一の2校であった。后藤木津の寺子屋は木津にあった。

### 3 犬山地域の山村・農村と寺子屋教育

#### (1) 近世末の城東村・池野村・楽田村・羽黒村

『犬山市史』通史編上によれば、犬山市域の近世の村々は、いるかいけ入鹿池築造に伴う新田村と継鹿尾村を除く、全村が成瀬氏の支配に属した。かんぶんむらむらおほえがき『寛文村々覚書』から作成した村々の

表3 犬山市域の村々の元高と概高

村名	元高	概高
二ノ宮村	56石300合	85石055合
楽田村	3,064石875合	3,907石190合
富士村	104石691合	126石912合
安楽寺村	46石776合	50石260合
羽黒村	2,566石527合	3,059石487合
塔ノ地村	876石477合	1,096石317合
五郎丸村	838石924合	1,056石437合
橋爪村	1,462石481合	1,700石905合
富岡村	526石865合	677石802合
善師野村	755石176合	941石020合
上野村	361石237合	443石597合
木津村	176石000合	120石367合
今井村	532石475合	502石685合
栗栖村	118石944合	136石295合
犬山	2,190石009合	3,472石250合

原資料『寛文村々覚書』

(『犬山市史』通史編上 592頁)

もとだか ならしだか  
元高と概高を示した表があるので、表3として転載しておこう<sup>18)</sup>。犬山市域の村の規模を概高から見ていくと、楽田村(3907石190合)が最大規模の大きな村で、ついで羽黒村(3059石487合)が大きく、橋爪村(1700石905合)、塔ノ地村(1096石317合)、五郎丸村(1056石437合)、善師野村(941石020合)と続く。今井村・上野村が500石前後で、あとはそれ以下の石高である。

尾張藩では、東部丘陵地帯の開発として入鹿池の築造工事が寛永年間に行われ、慶安年間に木津用水、寛文年間に新木津用水が行われた。入鹿池—入鹿用水が1633(寛永10)年の完成、木津用水が1650(慶安3)年、新木津用水が1664(寛文4)年にできて、尾張北部の全域にわたって幹線水路が

整備された。1670(寛文10)年までに7万8000石の新田が開発されたのである。

19世紀初めの樋口好古編『尾張徇行記』(1822=文政5年)により、犬山市域の村々の農業生産の様子を概観してみる。楽田村は「此村ハ高二準シテ戸口多ケレトモ、大郷故ニ佃力ユキトトカス貧村ナリ、村中見トラス所皆細民ハカリ也、八曾山ヨリ柴薪ヲ採テ生産トスル、俣採香ヲ製スル」としている。農産物にはほとんど触れていない。生産物の状況によって、村の貧富度の評価を行っている。羽黒村は「此村ハ戸口多ク高二準ジテ、佃力足レリ、農業ヲ以テ専ラ生産トス、村立ハヨキ所ナリ」と、楽田村と同様の記載である。橋爪村は「高二準ジテ戸口多ク佃力足レリ、村立ハ大体ヨクシテ細民ハカリナリ、農業ノミヲ生産トス」とあり、五郎丸村、塔ノ地村もほぼ同様の村の評価を行っている。

全体として、樋口好古のこの地域の村々の評価は、他の丹羽郡内の農村に比べると厳しい。村々は洪積台地上に立村しており、粘土質中心の土壌で畑作に不向きであった。田・畠の比率が3対1、山村ではそれ以上に田の比率が高く、畑作を基幹として綿や胡麻や野菜など多様な商品作物を栽培するのに適していなかった<sup>19)</sup>。しかも、大きな村であった楽田村と羽黒村の田畑は、下田・下々田の比率が50%以上であった。羽黒村の畑は下畑・下々畑が約50%、楽田村に至っては62%を占めており、田畑の等級が低く、生産性が低かったのである。

では、羽黒村や楽田村では、畑作物として何が栽培されていただろうか。楽田村内久保地区の資料では、1865(慶応元)年の畑15町6反7畝4歩のうち、綿が5町5反5畝(約30%)栽培され、大豆2町3反7畝、薩摩芋1町9反6畝が続く。大豆や小豆の豆類は

10%ほど栽培され、他に蕎麦、稗、荳蔻麻なども栽培された。羽黒村朝日組の1865（慶応元）年資料でも、畑11町8反9畝のうち、綿が3町7畝と一番多く、ついで大豆が1町8反、小豆1町6反と続き、蕎麦や大根も栽培されている。綿は中畑での栽培で、換金性の高い商品作物であったが、金肥である油粕や干鰯などを購入しなければならなかった。

養蚕については、木津村・上野村の2村に記述があるが、江南市域の村々や扶桑町域ほど行われていない。これは桑の生育に不向きな粘土質のやせた土壌であったからである。

## (2) 犬山市域の城東村・池野村・楽田村・羽黒村の寺子屋の教育

犬山市域の城東村・池野村・楽田村・羽黒村の寺子屋は、次の表4のとおりである。表2と同じく、『愛知県寺子屋一覽』（1973年）を基礎にして、『日本教育史資料』八（1883年調査）、『維新前寺子屋、手習師匠、郷学校、私学校の調査』（1931年調査）の2つの先行調査との関連を示した。以下の○印は1883年調査、△印は1931年調査、□印は1973年調査で新規発掘、●印は1973年調査で未記載の寺子屋を示す。

表4 犬山市の寺子屋(2)——犬山市域の城東村・池野村・羽黒村・楽田村の寺子屋

師匠名	身分	所在地	生徒数	学科	開業	廃業	備考
<b>(城東村域)</b> 明治39年 善師野村・岩田村・今井村3村合併							
27堀沢桃庵	医	善師野村	男40	読(漢)・書			○
28堀沢泰二	同	同	男30	同			○
29萩野月鑑	僧	同	男20	同			○
30梶川恵静	同	同		同		*清水寺	○
31市橋泰応	同	同	男20	同			○
32倉知宜孝	同	同	男20	同			○●
33願山	同	同	男20	同	嘉永4	明治15年	*陽徳寺 □
34宇佐見改住	説教師	同		同			□
35紀藤又助	平民	塔野地村	男45	同			○●
36浅右衛門	同(農)	同	男50		幕末期		*子万吉も師匠
37大沢又兵衛	同	同		読(漢)・書	幕末期		□
38宗栄寺	僧	同					□
39宮地信定	平民	栗栖村	男40	読(漢)・書	天保期	明治8	○△
40全由	僧	同	男40	読(和)・算	万延期	明治8	*大泉寺 △
41長瀬倉蔵	平民(庄屋)	同	男20	読(和)・書・算	安政期	明治初	△
42保浦ます	平民	継鹿尾村	男40	読(漢)・書	安政期	明治初	○△
*保浦理左衛門の妻、犬山市域唯一の女師匠							
43顕意	僧	同	男10	読(漢)・算	明治8		*寂光寺、岩田大鳳も □
44小川津右衛門	同	富岡村	男30	読(漢)・書			○
45伊藤侑一郎	医	今井村	男30	同		明治7	○
46中野 榮	平民	同	男30	同		明治7	○
47瑞木泰衛	僧	同	男30	同		明治7	*光陽寺 ○△

<b>(池野村域)</b> 明22.10に5村合併、明23.10今井村分離して池野村							
48	入鹿真清	僧	前原村	男30	書		*福昌寺 ○
49	武内藤三郎	平民	奥入鹿村	男25	同	文久元 明治3	○
50	宮島仁左衛門	同	同	男10	同	安政初 明治5	○ △
51	竹内八左衛門	工	同	男23	読・書・算	天保11 文久元	*犬山藩刀鍛冶、俳句 △
52	榊原英太郎	士	同	男7	読・書	明治2 明治5	△
53	加藤甚九郎	平民(庄屋)	同	男12	同	文久2 明治元	*73年は勘九郎 △
54	天野一兵衛	同	平民 神尾入鹿新田	男4	書	安政5 慶応期	△
55	三品某	士	同		同	文政9 文政11	*犬山藩山廻り役 △
56	石原某	同	同				*同上 △ ●
57	石岡要一	同	同		読・書	天保10 天保15	*同上、31年の身分山伏 △
58	原勇次郎	同	同		同	嘉永2 嘉永5	□
*1973年調査は、石原某と原勇次郎を混同して、石原勇次郎としている。							
<b>(羽黒村域)</b> 明22.10							
59	田中恵実	僧	羽黒村	男60女20	読・書・算	天保期 明治7・8年	△
60	田中太心	同	同	男50	読(国)・書	明治元 明治12	*立円寺 ○
61	藤本証円	同	同	男30	同	元禄期? 明治3	*観音寺 ○
62	齊木瑞光	同	同	男30女8	読(漢)・書	天保期 明治13	*宝竜院 △
63	小笠原戒堂	同	同	男30	書	安政期 明治初	*興禅寺 □
64	齊木五平治	医	同	男30女10	読(漢)・書	嘉永期 明治元	△
65	長谷川文敬	同	同	男25	読(国)・書	安政期 明治5	○ △
*玄通は、文敬の後継者で天保期から寺子屋を経営							
66	渡辺 現	平民	同	男20	書	慶応期 明治8	○
67	松浦義十郎	同	同	男10	同	慶応期 明治10	○
<b>(楽田村域)</b> 明11.12に4村合併で学伝村→明22.10楽田村に改称							
68	大島悦治郎	平民	楽田村	男50	読・書	天保期 明治5	○ △
*1931年調査「大島悦治(次)郎」、73年調査は「大島錢太郎」							
69	松山作右衛門	同	同	男15	読・書・算	嘉永期 明治5	○ △
70	在藤伊織	神官	同	男20	書	明治初	○ △
71	稲吉賢吾	同	同		同	明治初 明治20	○ △
72	元方佐京	同	同		読・書	天保期 嘉永期	○
73	倉知方円	修験者	同		読・書・算	天保期 嘉永期	*常宝院 ○ △
	倉知円水子	平民	同	男10	同	嘉永期 明治14	△
74	密護院	僧	同		読(和・国)		△
75	伊藤尚伯	医	楽田原新田		読	安政期 元治期	□
76	伊藤良慶	同	同		書・算	明治初	△
77	重松平馬	神官	二之宮村	男20	読(漢・和歌)書・算	天保期 明治5	*大県神社 △
78	伊藤孫左衛門	平民	同	男20	読・書	嘉永期 明治初	△
79	長久院	修験者	同	男20	同	嘉永期	△
80	永泉寺	僧	同	男女50	書・算		△
81	鈴木本雄	平民	同		読(漢)		□

(注) 1973年調査は、32倉知宜孝、35紀藤又助、56石原某の3つの寺子屋を欠落

表5 犬山の寺子屋数の変遷

○印=『日本教育史資料』八(1892年)、△印=愛知県教育会調査(1931年)

□印=愛知県教育センター『愛知県寺子屋一覧』(1973年)、●印=73年調査未記載校

	1892年本 ○印	1931年調査 △印	1973年調査	*新発掘 □印	*未記載 ●印	修正寺子屋
犬山町	9校	7校	25校	(12)	+1	26校
城東村	9	5	19	(5)	+2	21
池野村	7	7	10	(1)	+1	11
羽黒村	6	5	9			9
楽田村	6	9	14	(2)		14
合計	37校	33校	77校	(20)	+4	81校

1931年調査は、愛知県教育会が当時の尋常高等小学校や尋常小学校の教師に校区の寺子屋調査を行わせたものである。学校により内容に精粗があるが、次のように犬山の寺子屋の実態が詳しくわかる<sup>20)</sup>。(以下の寺子屋師匠の番号は、表4の数字である)

#### 〈楽田尋常高等小学校〉

楽田村本町の68大島悦治(次)郎の寺子屋は、寺子数男50で読・書の2科を教えた寺子屋である。大島悦治郎は大島善七の三男で、幼学を78伊藤孫左衛門に、和歌を77重松平馬に、漢学を81鈴木本雄と80永泉寺住職に学び、16歳の時師匠となり天保年間(1830～43年)に私宅で開塾した。52歳の時、1872(明治5)年に松山義根(後の丹羽郡長)が義校を開くに及び廃業した。7歳から12歳までの寺子を教えて、修業年限はとくに定めていない。習字は御家流の書法で、名頭・村付・日本国付・商売往来・庭訓往来を教えた。読本の教科書は、「実行経(ママ実語教)・孝経・論語・孟子・五経・大学」を使用している。束脩・謝儀は、「塾生の志に任せり、但し貧生よりは受けざりし」とあり、経済状態に即して受け取っており、貧しい子には無償で教えた。

楽田村の77重松平馬(大県神社神官)、医師の76伊東良慶、73倉知方円(常宝院、修験者)、78伊藤孫左衛門、71稲吉賢吾の5つの寺子屋での束脩・謝儀も大島と同様であった。79長久院で修験者の山伏が寺子屋を開塾しており、74密護院も真言宗の密教系の寺であり、文字を教えている。

#### 〈羽黒尋常高等小学校〉

羽黒村の寺子屋に関して、1931年調査と1973年調査は大きな差異がみられる。表4は1973年調査に基づき作成した。寺子数は59田中恵実(僧)の寺子屋が男60女20と最も多く、60田中大人(僧)が男50、医者64齋木五平治が男30女10、62齋木瑞光(僧)が男30女8と続いている。他村に比べると、同村は女子の寺子が多く通っていることがわかる。学科は読・書の2科が多くて、読(漢)・書2校と読(和)・書3校とあるが、詳細は不明である。1931年調査によれば、読書で「実語教・童子教・四書五経・商売往来」をあげているが、読(漢)と読(和)の違いはわからない。謝儀に関しては、59田中恵実の寺

子屋と同様としており、「5節句に心附（赤飯・白米）と盆・正月に心附（金2分～1両）」で、物納と金納の両方で納めている。

#### 〈池野尋常高等小学校〉

池野村では、51武内八左衛門の寺子屋の姿が具体的によく分かる。武内の身分は、1931年調査では農（庄屋）とあるが、1973年資料では犬山藩刀鍛冶で平民（工）となっている。違いの理由は不明である。1931年資料に従うと、寺子は8・9歳～11・12歳の3ヶ年の修業で、意欲ある者は更に3ヶ年学んだという。寺子数は男40人（1973年調査23人）で、学科は読・書・算の3科であった。習字の書法は、御家流ではなく大江流とおおえりゅうとおおはしりゅうとおおはしりゅうと大橋流であり、師匠直筆の習字手本（行書・草書）を書かせた。読本では、三字経・名頭・村附・国附・商売往来・孝経・大学・中庸・孟子・論語・十八史略を使っており、算術は珠算の加減乗除法を教えた。

東脩・謝儀に関しては、「中元・歳暮には金員を以て謝をなし、5節句には祝の馳走を贈呈す」とある。中元・歳暮として金納で納めさせ、5節句には師匠が寺子に馳走して振る舞っていた。また、天神講を行い毎月25日は休業として、天満宮に神酒・菓子・筆等を供えて饗応している。寺子の娯楽を考えて、「遠足・茸狩・兎狩・才日待講・談話会・俳句・狂能会」を行い、2月初午の日は教師が全生徒を饗応した。寺子屋の師匠と寺子の親密さが目に浮かぶようである。

#### 〈城東尋常高等小学校〉

塔野地村中ノ郷に36浅右衛門の寺子屋があった。浅右衛門の身分は農（庄屋）で、その子万吉も師匠となったが、なぜか苗字が明記されていない。開業は幕末期とだけ書かれて、時期は不詳。寺子は男50人で3ヶ年程度、謝儀は盆・正月に品物を添えて100～200文の謝礼であった。教科は手習いの書のみで神社・寺院に献書させており、1931年調査によると1883（明治6）年に廃業している。塔野地村には英明学校が設立されるが、35紀藤又助が教員になっている。

#### 〈城東第3尋常小学校〉

栗栖村・継鹿尾村にはユニークな2つの寺子屋があった。1つは大泉寺の40全由（大泉寺）の寺子屋で、1860（万延元）年に開業して1873（明治6）年に廃業した。謝儀は5節句に30～50銭を受け取り、維新前は12～15歳の子どもを教えたが、維新後は5～6歳の子どもを2年位教えたとある。学科は読（和）・算の2科、名頭・村附・国附・商売往来・18史略・近古史談を使用した。全由の寺子屋はその後、明治6年栗栖義校、明治8年栗栖学校、明治17年善師野村小学栗栖学校、明治25年善師野村栗栖尋常小学校と変遷していった。

もう1つの寺子屋は犬山市域ばかりか丹羽郡でも珍しい女師匠がいた。継鹿尾村の42保浦利左衛門の妻女の保浦やすの寺子屋で、安政年間（1854～60年）に開業し、男40人を教えている。女子の寺子数は書かれていないが、裁縫・家事を教えていた可能性があ

る。大泉寺と同様に読・書の2科を教えて、謝儀は5節句に各自から30~50銭を納めさせた。

### 〈城東第2尋常小学校〉

今井村では47瑞木泰衛（光陽寺）の寺子屋があり、読（漢）・書の2科を教えたとある。謝儀は「盆・正月に僅少の御礼及び日常の野菜物を贈る」とあるが、僅少の御礼が金納かどうかはわからない。

最後に犬山市域の寺子屋の師匠の身分、学科、開業・廃業をまとめておこう。その前に寺子の男女数に触れておくと、犬山市域の村々では女子の寺子がきわめて少なく、男子のみがほとんどである。確認できる55校の中で女子の寺子がいたのは3校のみであった。寺子屋の師匠に至っては、女師匠は保浦ます1人であった。

#### 1. 寺子屋師匠の身分

表6に見るように、各村々によって師匠の身分が大きく異なっている。1931年調査では池野村の士族5人は、犬山藩士で山廻り役の者である。55三品某が1826（文政9）年に、57石岡要一が1839（天保10）年に、58原勇次郎が1849（嘉永2）年の幕末期に開業している。52榊原英太郎は維新後の1869（明治2）年だが、56石原某の開業は不詳である。このうち神尾入鹿新田が4人、奥入鹿村が1人であった。同村では平民（農）5人も寺子屋を開いている。他方、城東村と羽黒村では僧侶の師匠が多く、城東村で10校、羽黒村で5校であった。城東村では医師が3校と他の村より多い。楽田村では、大泉神社の神官などが4校を開き、修験者も2校を開いていた。他村と違い僧侶は2校と少ない。

表6 犬山市域の寺子屋師匠の身分

	士族	平民	僧侶	神官	修験者	医者 不明	合計
城東村		7	10		1	3	21
池野村	5	5(工1)	1				11
羽黒村		2	5			2	9
楽田村		4	2	4	2	2	14
合計	5校	18校	18校	4校	3校	7校	55校

#### 2. 学科

市域の村々では、読・書・算の3科の寺子屋は合計6校と少ない。城東村・池野村・羽黒村では、算術がほとんどの寺子屋で教えられず、楽田村のみが例外で書・算の2科の寺子屋があり、3科の所を加える5校で教えられた。南に隣接する小牧村があり、市が開設されていたことと関係していると推測される。池野村は木曾川上流の奥まった村で、書のみ寺子屋5校で手習いが重視された。

表7 犬山市域の寺子屋の学科

	読・書・算	読(漢)・書	読(国)・書	書・算	読・算	読	書	不明	合計
城東村	1	16	1		1			2	21
池野村	1	4					5	1	11
羽黒村	1	2	3				3		9
楽田村	3	4		2		2	3		14
合計	6校	26校	4校	2校	1校	2校	11校	3校	55校

\* 1973年調査にある読(和)は、読(国)に分類した。

### 3. 開業年・廃業年

市域4ヶ村の開業年では、天保期(1830~44年)が9校と一番多い、嘉永期(1848~54年)6校、安政期(1854~60年)7校、万延期1校、文久期(1861~64年)2校、慶応期(1865~68年)2校、幕末期2校となっている。開業時期は丹羽郡全体の傾向である天保期から安政期が多いと同様である。廃業年に関しては、明治初年9校、明治5年5校、明治7年4校、明治8年4校、明治10~15年5校であり、明治5年8月の学制頒布以降が多いのは当然であった。

ところで、開業年に関して羽黒村の61藤本証円(観音寺)の寺子屋を元禄期(1688~1704年)と1973年調査が記載している。藤本の寺子屋は1931年調査に全く報告されていない。『犬山市史』資料編上はこれをそのまま転載しているが、元禄期(1688~1703年)の早い開業時期には少々疑問が残る。

## 3 犬山における小学校の設立・開校

### (1) 犬山の義校創設から小学校の設立・開校へ

犬山における小学校の設立・開校は、犬山城下と五郎丸村、楽田村の義校の創設の動きを引き継いでいる。犬山の義校に関する資料は、稲置村の2校の開設の動き、五郎丸村の「義校設立願」、楽田村の松山庄七宅の義校が確認されている<sup>21)</sup>。犬山の義校開設の中心になったのは、城下町で旧藩校の関係者が多く、市域では地域の有志たちであった。

義校とは、1871(明治4)年7月14日から8月にかけて、名古屋藩が義校開設布告を出して、廃藩置県後の名古屋県が引き継いだ公的な学校設立である。7月25日に学校懸権少参事宛の達書は、旧藩の藩校を改革して小学校を作り、明倫堂の士族の年少者(素読生)を移して、ここに農商子弟も入学させるとした。入学に当たり「袴着用可致候」でかつ「父兄出校之上可相伺候」とも書いていた。明治維新により四民平等を建前に入学させる学校を創設しようとしたが、士族以外の農商の子どもは入学しなかった。そこで旧来からの寺子屋・私塾を町や村で維持・管理する学校として「義校」を創設する政策をとったのである。名古屋県から旧愛知県に変わっていき、尾張地域の旧愛知県は公的品格を持つ学校として義校を誕生させようとした。

名古屋市街から県内各地に設立されていくが、丹羽郡では犬山と柏森村の義校開設に関



して、『愛知県教育史』第3巻に1872(明治5)年7月の次の資料がある<sup>22)</sup>。

「  
元犬山県貫属 北尾信尾、小川涉、田中円蔵、広瀬久四郎  
其方儀有志之者申合稲置村旧学校「ニ」於テ 義校ようどうのものもじしゅぎょういたさせたく開關幼童之者文字修業為致度  
申立之趣 奇特云々」  
「  
丹羽郡柏森村 専修院 兼松平左衛門  
其方義文明之御主趣ぶんめいのごしゅしゅヲ奉認シ 境内ニ仮義校開關 旧犬山貫属士族柴山鉄弥太弟伴男しばやまつや た ともお  
ヲ相雇童蒙教育云々」

稲置村では、明治5年7月段階で、士族の有志が義校を創設する動きを見せたのである。稲置村の義校は、翌年明治6年3月に犬山城下で2校が開設された。1つは、3月3日に旧犬山藩大官役所建物全部を借りて開校した「琢成義校」で、もう1校は祥雲寺を借用した「稲黄義校」であった。この両校は、愛知県による義校から小学校への転換政策により、同年秋には琢成学校と稲黄学校となっていった<sup>23)</sup>。稲置村における2つの義校の存在は、士族の子弟と農商の子弟を同一場所で学ばせることが困難であったことを示している。ひるがえって犬山藩校敬道館が農商の子弟の受け入れを掲げていたが、身分制度の厳しさの前では実現しなかったとみられる。

犬山城下の2つの義校は明治6年中には小学校に転換していくが、琢成学校の教員に就任したのは旧藩校敬道館時代の助教だった柴山伴男(戸田勉室の弟子)、真野政忠(村瀬太乙の弟子)、杉山錦平(村瀬太乙の弟子)たちであった。永田逸平は元寺子屋師匠であった。また、稲黄学校の大野功彦(大野勘左衛門の弟子)も藩校関係者であった。稲黄学校の教員の鈴木直弥と外山錫は、前歴が不明である。柴山伴男は敬道館の最後の塾頭であった。

明治6年2月に五郎丸村の「義校開設願」が戸長・副戸長から愛知県の井関盛良権令宛に出され、2月28日に権令から「聞届候」の書面を受け取っており、庚申堂で義校を開設した。義校設立願を下記に引用する<sup>24)</sup>。

方今文明開化之御時勢ニ付諸村おゐいても追々義校取建相成候折柄、とりたてあいなりそうろう 敵邑之細民共一文  
不通之者多く御布令等了解仕候者無く、付而ハ稲置村住貫属士族戸田孝一郎を相雇ひ農間  
を以講日童蒙教諭為仕度、付而ハ当村庚申堂を以仮義校トシ、とだこういちろう 追而本校相立官ヨリ教授を  
も申下シ右様相成候ハハ、聊文明之一端ニも奉校候間 御庁濟被下置候様仕度、右  
速御許所之程 奉 願 候 以上

丹羽郡五郎丸村

癸酉二月

中村半右衛門

宮田 幸四郎

副戸長 宮田 定平

戸長 吉野 慶吾

義校教員に招く戸田孝一郎<sup>とだこういちろう</sup>は、藩校敬道館教授戸田勉室の子息であった。五郎丸村の仮義校は、明治6年中に小学校となり不二学校と称していく。

楽田村の義校は、明治5年6月14日に松山義根<sup>まつやまよしね</sup>（丹羽葉栗郡長<sup>まつやましゅうしち</sup>）の父松山庄七ら村内有志の尽力で、松山庄七の控屋敷に開設された。丹羽郡内では楽田村がいち早く義校を開設し、5年8月に柏森村専修院がこれにつぎ、6年3月に犬山城下で2校が開設した。小折村、岩倉村では義校は創設されず、愛知県の政策転換により義校でなく小学校を設立していった。楽田村の義校は明治6年に三余学校<sup>さんよ</sup>となり、楽田原新田の草偃学校<sup>そうえん</sup>も同じ年に開設されている。同校は明治9年に真霊学校<sup>しんれい</sup>と改称した<sup>25)</sup>。

## (2) 明治6～10年の小学校の設立と開校

犬山市の小学校の正確な創立年月日を確定するのは、きわめて難しい。愛知県から明治政府への報告資料として、内閣文庫「愛知県 政治部学校草稿」（明治9年11月）<sup>26)</sup>がある。この内閣文庫印の資料では、犬山市の小学校は、1873（明治6）年10月1日に琢成学校、稲黄学校、志立学校の3校、10月5日に三余学校、小弓学校、不二学校、草偃学校の4校、10月11日に永明学校が、創立となっている。

一方、『各小学校沿革調査』（愛知県図書館所蔵 1931年）では、稲置村の琢成学校と稲黄学校が明治6年11月22日、羽黒村の小弓学校が同年12月5日の3校が創立年月日を記しているだけである。同年10月創立とする塔野地村の永明学校分校もあるが、他はすべて、明治6年創立とするのみで月日までは確定できない。とりあえず、現段階では犬山市で明治6年に小学校が設立・開校したのは、犬山市域では稲置村の琢成学校、稲黄学校、善師野村の志立学校<sup>しりつ</sup>、塔野地村の永明学校<sup>えいめい</sup>、羽黒村の小弓学校<sup>こゆみ</sup>、楽田村の三余学校<sup>さんよ</sup>、楽田原新田村の草偃学校<sup>そうえん</sup>の8校であった、としておく。

明治7年から10年までの小学校の変遷は、表8からたどることが出来る。表8は『文部省年報』第2年報から第5年報（明治7～10年）の教員数・生徒数、教場の一覧が出典である。明治9年5月の愛知県通達で町村名にちなんだ校名に変更されている。

明治初年の犬山市の小学校の生徒数を概観すると、旧城下町の琢成学校と稲黄学校の両校が、男女とも圧倒的に多数の生徒数であることが目を引く。琢成学校は200名規模から300名規模の大規模校であり、稲黄学校も男子が100名以上、女子も約40名から80名という生徒が就学している。旧城下町での藩校、寺子屋の生徒数をはるかに超える子どもの就学が実現したのである。城下町の周辺農村の小学校でも、塔野地村の永明学校では、明治8年から男子生徒は100名を超えており、善師野村の志立学校でも男子は60名から80名に急増していく。楽田村の三余学校、羽黒村の小弓学校、五郎丸村の不二学校<sup>ふじ</sup>も同様に、男女とも生徒数が増加している。楽田原新田村の草偃学校は、農村部にありながら男子生徒が70名以上80名を超えている。

小学校の設立・開校で男子の就学生徒が、寺子屋とは比較にならないほど急上昇してい

表8 明治7～10年の犬山市の小学校——教員数・生徒数等

学校名	明治7年		明治8年		明治9年		明治10年	
	教員数	生徒数	教員数	生徒数	教員数	生徒数	教員数	生徒数
琢成 (稲置村)	男3	男153女54	男4	男111女76	男5	男211女154	男8	男165女133
稲黄 (稲黄村)	男3	男108女37	男3	男99女82	男3	男113女74	男7	男108女53
志立 (善師野村)	男2	男57女12	男2	男64女14	男2	男78女22	男2	男82女11
永明 (塔野地村)	男2	男37女15	男3	男109女14	男4	男130女44	男4	男127女4
草偃 (楽田原新田)	男4	男89女14	男2	男73女11	男2	男74女11	男1	男75女8
三余 (楽田村)	男2	男42女10	男2	男48女10	男1	男56女14	男1	男48女13
小弓 (羽黒村)	男2	男61女20	男3	男83女19	男2	男83女20	男1	男76女19
不二 (五郎丸村)	男2	男44女10	男1	男35女11	男2	男47女57	男2	男46女58

(『文部省年報』第2～5年報 1874～77年より作成)

くが、女子の就学は旧城下町を除くと低率であった。尾張北部の丹羽郡では女子への教育の必要性が明治初期は広まっておらず、実用的な裁縫科や家事科という学科が準備されていなかったことが原因であった。中島郡では女子の就学率が格段に高かった。

犬山市の城下町や市域では、他地域にくらべ小学校教員の確保は容易であった。多くの小学校で教員が複数であったのは、藩解体による士族層の教員への転換により人材が確保できたからである。また、教員の質的な面でも、藩校教育があったので一定の質の教員を確保できたことは有利な条件であった。しかし、明治10年代に入って文明開化の教育内容である、洋算、化学・窮理・博物・生理、地球儀・万国地理・万国史を教える教育が求められる。西欧の翻訳調の教科書や問答法などの新しい教授方法で教えられる教員になるには、新たに設立された教員養成の学校で学び直さねばならなくなっていく。

### (3) 明治期における犬山城下の小学校の変遷

#### 〈犬山尋常高等小学校〉

明治6年に城下に設立された琢成学校は、明治9年に犬山学校と改称した。しかし、1877(明治10)年2月20日に連区改正があり、同校は第1番稲黄学校と再び校名を改めており、城下の稲黄学校は第2番稲黄学校と称した。これとは別に練屋町の集会所に第3番稲黄学校が設立・開校された。生徒数は第1番稲黄学校約350名、第2番稲黄学校と第3番稲黄学校が各100名内外であった<sup>27)</sup>。『文部省年報』第5年報の記載と異なっている

が、詳細は不明である。

1886（明治19）年11月の小学校令により、小学校が簡易科（3年）、尋常科（4年）、高等科（2～4年）の3科の資格別になると、1888（明治21）年4月に尋常小学稲黄学校と改称していく（他県では尋常科〇〇学校の校名が多い）。分場（分教場か？）を常満寺、専念寺、練屋町に設けたとあり、実質的に3校の学校体制を維持している。1889（明治22）年1月26日に常満寺分場を演武場に移していき、5月28日に大字名栗に新築校舎の落成式を挙行、6月3日より授業を開始した。翌1890（明治23）年の「小学校令」改正（第2次小学校令）により、明治25年に尋常小学犬山学校と改称、10月の犬山の町制施行で町立犬山尋常小学校と再改称していく。

1906（明治39）年10月に犬山町は、岩橋村（明治22年に五郎丸村・橋爪村合併）と統合合併する。翌1907（明治40）年5月に犬山第1尋常小学校を名栗町以北、犬山第2尋常小学校を名栗町以南とした。1912（明治45）年に前者は犬山北尋常小学校と一時称するが、大正期になり犬山尋常高等小学校、後者は犬山南尋常高等小学校となっていた。

#### 〈犬山高等小学校〉

1880（明治13）年6月5日に丹羽葉栗郡第1番高等小学校が、稲黄村に設立され開校した。旧藩校敬道館助教の芝山伴男が校長となった。これは丹羽葉栗郡長の松山義根が尽力して創設したもので、第2番高等小学校は小折村に、第3番高等小学校は葉栗郡島村に設立された。最初は専念寺を校舎としていたが、後に常満寺に移った。その教科課程は「今の（明治37年頃）高等小学校よりも高尚にして1種の簡易中学たるの観ありき」（松沢鎮『犬山』）であった。初等レベルより中等レベルの教育内容を志向したというべきか。

1885（明治18）年7月に、郡立の3校体制は予算的に困難となり1校に統合されて、丹羽葉栗郡公立<sup>かんよう</sup>酒養学校となった（小折村に設置）。校長は岡野直方で、敬道館出身者であった。しかし、稲黄村の有志は1887（明治20）年4月に稲黄村に丹羽葉栗郡第2番高等小学校と称して存続させようとしたが難しく、1889（明治22）年に丹羽葉栗郡高等小学校稲黄分教場（又は第1分校）として設立していく。存続運動が功を奏して、1892（明治25）年10月になり丹羽郡第2高等小学校が開校できた（明治24年に葉栗郡が分離）。1894（明治27）年5月に、犬山町と4ヶ村（岩田村・岩橋村・善師野村・今井村）が組合立の犬山高等小学校を設立して、校名を改称していった。犬山尋常高等小学校の敷地内に1895（明治28）年に校舎を建築するが、生徒が増加して1899（明治32）年に北古券に移転増築した。

#### 注

- 1) 木全清博「尾張北部の旧丹羽郡の学校史(1)―岩倉市の寺子屋から小学校設立へ―」（『名古屋芸術大学研究紀要』第40巻 2019年3月）、同「北名古屋市（旧師勝町・旧西春町）の寺子屋研究(上)―寺子屋の設立の背景と教育実態―」（『名古屋芸術大学教職センター紀要』第8巻 2019年3月）、「同上(下)―寺子屋から小学校の設立・開校へ―」（『名古屋芸術大学キャリアセンター紀要』第9巻（「教

- 職センター紀要を改題) 2020年3月)
- 2) 同「尾張北部の旧丹羽郡丹陽村・西成村(現一宮市)の学校史—寺子屋教育と私塾有隣舎から小学校の設立へ—」(『名古屋芸術大学人間発達研究所年報』第8巻 2020年3月)
  - 3) 同「尾張北部の旧丹羽郡の学校史(2)—江南市・扶桑町・大口町の寺子屋から小学校設立へ—」(『名古屋芸術大学研究紀要』第41巻 2020年3月)
  - 4) 『犬山市史』通史編上(1997年)826~831頁、犬山藩成立時の石高は3万5千石、1870(明治3)年10月2日現在の戸数1万1782軒、人口5万3302人、神社190社、寺108ヶ寺、士族1364人、卒族1073人であった。
  - 5) 『若山牧水歌集』(岩波文庫 1936年、58刷1989年)、引用和歌の原典は若山牧水『山桜の歌』1923年
  - 6) 太田正弘「犬山市の歴史」(森原章・吉永昭監修『愛知史蹟郷土史』1982年 219頁)
  - 7) 『同上書』223頁
  - 8) 『前掲書』注4)「犬山城下絵図」の町人地略図 480頁
  - 9) 『同上書』483頁
  - 10) 『同上書』520~521頁
  - 11) 愛知県総務部市町村課『市町村沿革史』2007年
  - 12) 文部省『日本教育史資料』壺(1890〈明治23〉年)、『同』四(1891〈明治24〉年)
  - 13) 市橋「犬山藩の教育とその事蹟—敬道館開書—」『愛知教育』第557号 1934年6月 122~129頁、同号は尾三各藩の藩校教育の特集号で、豊橋藩時習館・挙母藩崇化館・田原藩成章館・刈谷藩文礼館・西尾藩修道館・岡崎藩允文館・半原藩学聚館・重原藩養生館・西大平藩・西端藩の藩校の論文を掲載している。  
市橋は、戦後に藩校敬道館の論考を求められた時に、この論文をそのまま投稿している。「敬道館開書—犬山藩学—」『東海郷土文化史考』1975年 42~53頁
  - 14) 市橋「同上論文」125頁
  - 15) 『前掲書』注12)の『日本教育史資料』四「敬道館教授列伝」
  - 16) 市橋「前掲論文」127~128頁
  - 17) 『犬山市史』資料編6(1989年)「寺子屋一覧表」498~502頁。この表は愛知県教育委員会『愛知県教育史(古代・中世・近世編)別冊 愛知県寺子屋一覧』1973年の52~56頁を転載したものであり、犬山市は城下町・市地域の寺子屋の調査をしていない。
  - 18) 『前掲書』注4) 592頁
  - 19) 『同上書』646頁
  - 20) 愛知県教育会『維新前寺子屋、手習師匠、郷学校、私学校の調査』(1931年)
  - 21) 『犬山市史』通史編下 近代現代(1995年)
  - 22) 『愛知県教育史』第3巻(1972年)
  - 23) 松沢鎮『犬山』(犬山壮年会 1904年)
  - 24) 『犬山市史』通史編下 近代現代(1995年)295頁
  - 25) 愛知県教育会『各小学校沿革の調査 附教育会、青年団、女子青年団沿革並に社寺数の調査』1931年
  - 26) 『府県史料教育』第13巻(ゆまに書房 1986年)145頁
  - 27) 松沢『前掲書』注23)「現時の教育」32~38頁